

平成 27 年度

事業所名：グループホーム 愛の手（2階ユニット）

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	0390100030
法人名	有限会社 ケアホーム愛の手
事業所名	グループホーム愛の手 2階ユニット
所在地	盛岡市青山1丁目19-51
自己評価作成日	平成 27 年 11 月 18 日
評価結果市町村受理日	平成28年3月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_2015_022_kani=true&JigyosyoCd=0390100030-00&PrefCd=03&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成 27年 12月 16日

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

- ・季節感を出す展示物等で利用者の関心や話題を引き出す工夫をしている。
- ・身体を動かしたり、手を使うなど日々のレクリエーションに力を入れている。
- ・室温の調節や清潔な環境を保つよう努めている。
- ・利用者のレベルにばらつきがあるので、個々の不安や混乱に対応し体調の変化を見逃さないよう努力している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

1階9人、2階5人の2ユニット制のグループホームで、来春で開所して10年を迎えるところである。開所当初から入居している利用者も複数名おり、高齢化と重度化が進む中で、職員は、利用者が今出来ること、楽しめることに取り組み、健やかに不安なく日々を送れるよう支援にあたっている。利用者の多くは車椅子で生活しているが、さんさ踊りやチャグチャグ馬コ、地域の桜まつりなどを見学する機会をつくり、地域との関わりを持っている。また、車椅子でもできるボール遊びなど、身体を動かす機会をつくるように配慮している。協力医の定期的な訪問診療を基にターミナルケアに対する体制も整えつつあり、看取り経験のある職員が中心になって研修を重ねている。常に明るく丁寧にケアに取り組む職員の姿は、利用者や家族に信頼感と安心感を与えている。

V. サービスの成果に関する項目（アウトカム項目） ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

平成 27 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホーム 愛の手（2階ユニット）

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホール内に理念を掲げ職員が共有することで、利用者が安心して暮らすことができるようにしている。	理念は職員がいつでも意識できるように施設内に掲示し、各利用者が持つ能力を引き出し、生きがいや喜びを持てるよう、様々な生活場面(食事の準備など)で対応し、利用者に寄り添う支援に生かしている。	利用者の高齢化、重度化が進む中、残存能力の維持が最重要課題になってきており、現状を踏まえた理念やケアの方針の見直しに期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	公民館のイベントや桜まつりなど地域の行事にできるだけ参加するようにしている。	利用者は公民館の文化祭や地区の防災訓練など地域行事に参加してきたが、ここ数年は重度化の影響で参加が難しくなっている。町内会や近隣に声掛けし、地域住民にホーム行事に参加してもらうよう努めている。	利用者の重度化が進み、とすればホームの中での生活が中心になりつつあるように見受けられるが、外からの刺激を得ることも必要と思われる。今後とも、ホームと地域が関わり合う継続した取り組みを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々にホームの存在が浸透してきている。散歩時に声をかけて下さる方が増えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	参加率は良くないが会議は定期的に開催しており、参加者の意見は参考にさせて頂いている。	町内会長や民生委員を中心に構成されており、運営状況の報告に加え、地域に関することもテーマに加えながら話題を拡げるよう努めている。テーマを決めてゲストを招くなど推進会議の活性化を図りたいとしており、そのためにもメンバーの拡充を検討したいとしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村との連絡は電話やメールで行っている。	市とは主として電話により連絡を取り、連携を図っているが、適切な指導を得ている。また、地域包括センターとは日常的に連携し、協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないという観念は全職員に浸透しているが、他利用者の安全を守るため家族の同意を得て車椅子に安全帯を使用している方がいる。	身体拘束に関する資料を収集し、職員で話し合ったり、回覧しながら理解を深めている。危険行動が多いため、車椅子に安全ベルトを着用している利用者があるが、本人の気持ちに沿いながら拘束に繋がらないよう配慮しつつ支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	個々の知識の習得に任せているが、ホーム内での言葉がけなど注意している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員個々の知識の習得に任せている。関心のある職員は研修に参加している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の時点で説明しているが、説明後でも疑問に思うことや質問事項はいつでもお答えできるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の家族が来所された時に管理者や職員は家族からの話を伺う機会が持てるように努力している。	月に1回、家族あてに会報を出す際には、手書きの手紙を添えて送っている。また、なかなか来所できない家族とは電話で利用者の状況を伝える等、家族との切れ目のない関係づくりに努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者と職員が話し合いの機会を持ち業務の改善等図っている。	代表者は時折職員と話し合う機会を設けており、運営や体制について忌憚のない意見交換を行っている。また毎月のカンファレンス時にも話し合っており、昨年度職員からの要望により、浴槽のリフト化が実現したほか、2人介護や作業姿勢の工夫等、業務改善に職員全員で取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	就業規則を改善し職員のより良い労働環境作りに取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人にはマンツーマンで教えたり、実習生を多く受け入れることで職員の知識や技術の振り返りができる。グループホーム協会の研修やその他の研修に多く参加できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月に1度のグループホーム協会定例会に出席している。研修内容によりできる限り多くの職員が出席するようにしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人とのコミュニケーションを多くとり思いを聞いたり、職員が寄り添うことで安心してホームの生活が送れるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が来所する度にお話を伺い、利用者がホームで快適に過ごせるように、また家族の不安を少しでも軽減できるよう努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅のケアマネージャーや病院のケースワーカー・看護師の情報を参考にしながら対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は常に尊厳の気持ちを大切に人生の先輩として一つ屋根の下でともに生活するという意識を持って接している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族様には経過説明をし、協力頂けることはお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅がホームに移ったという感覚で気軽にお客様をお迎えしている。	家族が遠くにいてなかなか頻繁に来所できないことや、認知症により、知人や家族のこともわからない利用者もいるため、以前よりも関係が薄れてきている状況になっているが、関係は途切れないように支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホーム内は解放的でいつでも誰とでも交流できる環境にある。1階と2階も分け隔てなく行き来をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後でも、相談事などお受けすることを伝えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常のコミュニケーションを多くとることで利用者の思いや意向を聞くようにしている。また会話が困難な方にはしぐさや動作からの思いを察するように努力している。	日々利用者の表情、行動、仕草等でその時の思いや希望を把握に努めている。家族から昔ビールが大好きだったと聞き、ノンアルコールビールを出したところ、これまでない表情で喜んでくれた事例があり、改めて利用者一人ひとりから、ひとつでも新しい発見をしようと職員で確認合っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日々の生活の中で利用者との会話や家族からのお話を伺っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は利用者の観察を怠らず記録するべきところは記録し職員全員が情報共有できるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族からの要望及び申し送りやカンファレンスなどから各利用者に即した支援をし、なおかつ職員の負担の少ない援助を検討している。	利用者の健康面、身体面を中心にモニタリングやカンファレンスで確認しながら、ケアプランが現状に合っているかチェックし、必要な場合は協力医とも相談しながら、家族とも話し合い見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者の状況は毎日継続的にチャートに記録し誰が見てもすぐわかるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者のレベルにばらつきがでていたため、個々の状況に合わせた支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	市の予防接種助成などを利用し健康管理にいかしている。 床屋は地域の理容店に訪問して頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医はご本人や家族の意向によりきめている。ホームの協力医は月に1度訪問診療をしてくださる。	内科、整形外科は協力医による訪問診療が毎月あり、適切に情報交換が行われている。同じく往診のある歯科以外は家族同行の受診を基本にしているが、職員の同行も増えている。受診後は家族と相互に情報を共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	いつでも連絡・相談できる体制にあり、状況に応じて受診等できるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には必ず職員が同行し病院へ情報提供している。入院中は職員が訪問し、入院中の情報はすぐに伝わるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族が希望すれば、ホームで看取りを行っている。協力医の訪問もあり、家族・協力医・ホームと連携しながら利用者・家族が満足できるよう努力している。	重度化、看取りに関する指針を定めており、これに基づき、希望に沿って支援を行うことを家族に説明し、同意を得ている。これまでに3人、看取りの経験がある。職員はターミナルケアの研修に参加するなど、職員同士の意識の共有を図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応マニュアルを作成し全ての職員が対応できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時のマニュアルを作成している。避難訓練を日中・夜間それぞれを想定して行っている。	年1回は消防署立ち会いの火災避難訓練を実施しているほか、事業所独自の訓練も行っている。災害対策のマニュアルを準備しており、日頃から災害への意識を職員同士共有している。また近くの県警察学校には災害時での協力支援をお願いしている。	建物は2階建てで、外に出るためには1階の玄関とテラスのみとなる。2階の利用者が階段を使っでの避難に時間がかかるようになってきたことから、スロープの設置等対策を検討しており、より安全かつスムーズに避難誘導を行えるよう工夫を期待したい。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は常に尊厳の気持ちを持ち利用者と接している。指示や否定をしないのはもちろんのこと、入室や介助を行う際にも利用者からの同意のもと行っている。	入居生活が長い利用者が多いことから、職員が馴れ合い感覚でぞんざいな言葉遣いや語調にならないようお互いに戒めている。トイレや入浴の際には本人の気持ちを大切にさり気ない誘導や介助を心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の会話や行動の中で本人が思いを表すことができるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	おおよその日課はあるが、個人のペース、意思を大切にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節や気温に合わせた服を用意し、その中から利用者が好みの物を着るようにしている。汚れた服はすぐに着替えるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の下準備、盛り付けや配膳や後片づけ等利用者と職員と一緒に行うようにしている。	以前はユニット毎に食事をつくっていたが、現在は同じメニューを1階と2階で役割分担をしながら両ユニット分を用意するようにしている。利用者は出来る範囲で役割を持って手伝っている。刻み食やミキサー食の人が半数以上になり、介助を必要とする人も増えていることから、ゆっくりと時間をかけて食事をとっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々に応じた食形態や量に配慮している。水分食事摂取量のチェックを行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりに声掛けをし、できない方にはそばについて支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	できるだけトイレで排泄できるよう支援している。オムツよりリハビリパンツ、リハビリパンツより布パンツへと移行できるように支援している。	排泄チェック表などで個別に確認し、できるだけオムツは使わずトイレで排泄できるように支援している。自力で排泄出来ない人もおり、時間をかけて介助している。夜間はトイレ誘導が難しい面もあり、おむつや尿取りパット、ポータブルトイレを併用しながら、出来るだけ安眠してもらうよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	各利用者の排泄パターンを知り、食品の工夫をしたり、腹部マッサージを施行したりしている。やむをえず下剤を用いる時も最小限にするようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日は設定しているが、1階と2階で別々に実施しているので無理強いはいしない。本人の意向も大切にしているが言葉がけにも工夫している。	週2回の入浴になっているが、1階と2階で入浴の曜日を替えており、希望があればユニットに拘らず対応している。多くの利用者が着脱や身体洗いに職員の助けを借りながらゆっくりと入浴している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日々の状況に応じて本人の休みたい時に休んで頂く。また、夜になかなか眠れない方には話し相手になったりして安心して休めるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各利用者ごとに薬の説明書をファイルしている。確実に服薬できているか二重にチェックしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	創作活動や運動などマンネリ化しないようにレクリエーションを工夫している。気候の良い日にはできるだけ外に出る機会をもつようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	車椅子の方も戸外に出かける機会をできるだけ持つようにしている。利用者のレベルや希望により個別対応をしている。	天気の良い日は、近隣の公園を散歩したり、玄関前で日向ぼっこをしている。向かいの病院の桜まつり、近くの沿道でのチャグチャグ馬つこ見物、着町七夕まつり見物は恒例の外出行事である。車椅子利用者もあり、個別に対応ながら出来るだけ戸外に出る機会をつくるよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	普段はお金の所持は必要ないが、少額を所持することで安心できる方は家族の了解のもと所持している。外出をして買い物をする機会があれば支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や知り合いからの電話はいつでもお取り次ぎしている。 手紙やはがきも本人の希望があれば準備している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	月ごとに掲示物を変え季節感を出している。空気清浄器・加湿器を使用し乾燥には気をつけている。 冷暖房を使用し過ごしやすいよう温度を調節している。	1階、2階とも広さは異なるが、同じつくりで、リビング・食堂を囲む形で居室が配置されている。暖房はパネルヒーターで、寒冷期はファンヒーターを併用している。トイレは1階、2階ともに3カ所で広いため車いすでも対応可能。エレベーターが設置されている。壁には季節に応じた装飾が施され、利用者也創作に加わっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	各居室にはいつでも出入りができる。共有スペースには和室やソファがあり、いつでも気軽に休むことができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご本人が希望されるものは持ち込むことができる。（人形、ラジカセ、仏壇、ソファなど）	入口にネーム入りの暖簾が掛けられ、個室としての雰囲気が出ている。車椅子を使いやすくするため、ベッドが中央に置かれたり、斜めに置かれたりと個別に工夫し配置している。持ち込みのソファや仏壇が置かれている部屋もあるが、全体的に清潔感があり、落ち着いた居室になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりを完備している。物の置き場所など配慮できるだけ広い空間を作るようにしている。		